

橋本毅彦 + 栗山茂久編著『遅刻の誕生 - 近代日本における時間意識の形成』(三元社、2001年)
西本郁子『時間意識の近代 - 「時は金なり」の社会史』(法政大学出版会、2006年)

日本の鉄道における正確な運行時間、工場の作業進捗管理でのジャスト・イン・タイムは、今や国際的に有名である。しかし、このような厳格な時間規律は日本人に備わっていた天賦の才ではなく管理と訓練の賜物のようである。

1979年(明治6年)に、時間を一様に等分した「定時法」である西洋式時刻制度が導入された。それまで日本人は昼間の時間と夜間の時間を等分して計測する「不定時法」のもとで生活していた。当然、季節によって時間の長さが変わり、現代人の日常生活とは異なったりズムが流れていた。お雇い外国人技術者は「日本人の悠長さといったら呆れるくらいだ」と嘆いていた。当時は、遅刻という概念がなかった。

『遅刻の誕生』は、1999年から行われた共同研究の成果物で、日本人は、いつ頃どのような経緯を経て今日のような時間規律を身につけてきたのか、この課題を5部12章(カッコ内)の構成をもって展開している。



第1部・定刻志向 - 鉄道がもたらしたもの(近代日本における鉄道と時間意識、1920年代における鉄道の時間革命)、第2部・時間厳守と効率性 - 新労働管理の発展(近世の地域社会における時間、二つの時刻・三つの労働時間、蒲鉾から羊羹へ)、第3部・時間の無駄のない生活 - 子供の教育と主婦の修養(子供に時間厳守を教える、家庭領域への規律時間思想の浸透)、第4部・新暦と時計の普及 - 近代的タイム・フレームの形成(明治改暦と時間の近代化、歳時記の時間、明治時代における時計の普及)、第5部・時間のゆくえ(農村の時間と空間、「時は金なり」)である。そして、最後に文献解題として「時間を考えるための50の文献」が紹介されている。本書のなかでは、つぎのような点に興味を持った。

- ・鉄道は明治初年における定時法の体現者であるが、それを迫ったのが「産業革命の進展にともなう輸送量および列車運転密度の上昇と、各鉄道間における連絡輸送の本格化」であり、定時運行は自動連結器などのイノベーションと労働者の熟練や労働強化があって実現したものである。
- ・明治前期の労働時間は、都市職人型と農村型、官庁型の3つがあった。「階層や都市・農村の別によって、全く異なる時刻体系や時間感覚、そして労働時間の習慣が並存していた。それが工場という場を中心に定時法の時刻体系やその時間感覚の下で、……統合される傾向が明らかになったのは、産業革命が始まり、近代的な国家体制の整備が緒につく1886(明治19)年ころであった。」
- ・「家庭領域への規律時間思想の浸透」は、羽仁もとこの主婦に対する時間節約に関する議論を紹介したものである。時間節約で生まれた時間は「主婦自らの修養のため、あるいは社会的活動のためにあて」よ、というものである。そのため「起床と就寝時間は、季節によって変えること(例えば、12月より立春までは午前5時半起床、午後9時半就寝、立春より5月までは午前5時起床、午後9時就寝)、食事の時間は、季節に関係なく一年を通じて『朝7時、晩5時と一定にする』」

ことを提唱している。現在とは隔世の感があるが、私の田舎の80～90歳台の高齢者には、もちろん主婦だけではないが、現在このような時間が流れている。

- ・「農村の時間と空間」は現代を扱っている。専業農家の生活時間の調査をもとに、不定時法の仕事、定時法の食事、通勤時間に制約されている大都会に対し「最終」という概念のない農村では夜の外出は「細切れ」で、長い。画一化した都市生活と多様で柔軟、「眠らない」農村の生活が紹介されている。

『時間意識の近代』は、『遅刻の誕生』を生み出した研究会のアイデアをも取り込んで、「主として明治以降の日本社会における諸制度の発展とそれとともに社会のペースの変化、その心理的な受けとめ方」を検討している。



日本人の時間意識は、明治時代の「大ざっぱな時間の国」から鉄道（分刻み）、ラジオ（秒刻み）によって精緻化され、20世紀初頭にテーラーの「科学的管理法」が紹介され、「能率」という言葉が産業だけでなく家事や育児など日常生活の場にまで浸透した。50年代後半以降は、高度経済成長時代を走り続けた訳であるが、70年代に入りちょっとひと息入れようという雰囲気が出たが、1990年代半ばからはインターネットの時代に突入し、社会にふたたび速度のはずみがついた。そして、「気をつければ、そこにはスピードにあえぐ人びとがいた。そのうめき声には、単なる速度緩和の要望以上の、より根源的な希求が込められている。それは時間、もっとはっきりいえば『自由な』時間への切望である」。このような状況判断の上に立って、現在を「時間をふたたび政治の領域において考える時期にきているかもしれない。なぜなら、自由とは、政治が伝統的に取り組んできた問題だから」との認識が提示されている。

今日、明治時代の定時の確立、時間意識の精緻化、ムダの排除、「能率」重視のシステムが社会に浸透、定着している。同時に、「定時」化は画一化の課程でもあった。日本人は今日、消費者として生活の最大の利便性を享受しているように思われる。しかし、その裏面にはそれを支えている“働きぶり”がある。いき過ぎると、うつ病や過労死とも無縁でない。そこには、「定時」、とりわけ「退社時刻」の融解があり、経済や人の動きのグローバル化はこの勢いを加速させている。

1980年代、「経済大国から生活大国日本へ」が国民的「合意」となった。現在、改めて「暮らしぶり」が検討課題に上っている。今回は、ワークライフバランスの実現である。その趣旨は、生活費を稼ぎ、家庭責任を果たし、地域社会への「お勤め」がほどよく按配された生活で、そしてこのような生活が男性と女性との双方が享受できる「ウインウイン」関係を実現することであろう。忙しいは「心を亡くす」と書く。先の二冊の本は、日本人の多様で柔軟性のある、ゆとりと自由を実感できる生活を考える際に参考になる文献と思われる。(S・T)

「蒲鉾から羊羹へ」は、科学的管理法を海軍工廠に導入・定着させた伍堂卓雄の日本人の時間規律についての表現で、「日本の労働者の能率は蒲鉾型で始め終わりが全くだらだらである。然るに欧米のやり方は羊羹の切口である。働く時は傍目を振らず働き、休む時は充分休養するのである」というものである。